

# 『伊曾保物語』 版本書誌解題稿

— 近世日本におけるイソップ寓話集出版の正像を求めて —

李 澤 珍\*

われる。

『伊曾保物語』版本については、戦前の川瀬一馬氏<sup>(1)</sup>をはじめ、戦後の中川芳雄氏<sup>(2)</sup>、森田武氏<sup>(3)</sup>に続く網羅的な調査研究が備わっている。筆者は目下、諸先学の精細な調査と整理に導かれ、現存する『伊曾保物語』版本を調査してきている。しかし、原本を披閲・調査する過程で、各図書館・文庫の目録解題類を含め、従来の記述に疑問を覚えることがしばしばあり、『伊曾保物語』版本の有機的かつ統一的な書誌解題の必要性を痛感したのである。

本稿では、いまだ不十分ながら、『伊曾保物語』版本の概略と現存諸本の書誌的特徴について、先行研究の成果によりつつも、これまで筆者の調査しえた限りでの修正を加えながら整理・報告しようと思う。

『伊曾保物語』<sup>いそほものがたり</sup>は、十六世紀後半にイエズス会の宣教師によって伝来された欧文イソップ寓話集の日本語抄訳本である。同書の版本は、寛永元年（一六二四）頃の無刊記第一種本をはじめとする九種類の古活字版と、万治二年（一六五九）の絵入り整版本およびその求版後印本の現存

が確認されている。近世の商業出版の成立・発展に乘じ、古活字版で少なくとも九回も版を重ね、続いて増刷が比較的容易な整版本の出版が要求されたこと、また仮名草子をはじめ後統する文芸作品の中に同書由来の寓話が多用されていること等から、当時の読者に広く迎えられていたと考えられる。英語訳イソップ寓話集の伝来が本格化する明治以前の日本において同書は、一般大衆が入手できるほぼ唯一のイソップ寓話集であり、従って西洋由来のイソップ寓話集訳本がどのように近世日本社会に送り出され、誰に、どう読まれたかを確かめるためには、その版本の諸本に対する悉皆調査とそれに基づく書誌的考察が欠かせないように思

## 【凡例】

一、書誌記述は、版種ごとに共通する事項をまず記し、各本においてはその固有の形態的特色が窺える表紙・題簽・印記・識語等を中心に録す。

一、版種の分類・命名・配列は、原則として現在通用されている森田氏<sup>(4)</sup>のそれを基盤とするが、版種判定・命名などの訂正を加えたところもある。

一、漢字の旧字体は、原則として新字体に改める。

一、欠落・虫損・不鮮明などで判読不能の箇所は□印で示し、また改行は「／」で示す。

一、印記については、現蔵者のものは割愛し、旧蔵者のもののみを記す。但し、旧蔵者印でも不明確な小印等は略す。

一、以下の『伊曾保物語』版本諸本はいずれも漢字仮名交り文で書か

れ、三巻（上・中・下）三冊の体裁で印行された袋綴本である。

## 一 古活字版

現存する古活字版『伊曾保物語』は、刊記を欠く無刊記本の七種類と、寛永十六年本の二種類である。無刊記本の刊行年代については、慶長元和中（第一種本）、元和中（第二・三・四種本）、寛永中（第五・六・七種本）という川瀬氏の学説<sup>5)</sup>がこれまでの通説であった。しかし近年筆者は、諸本の版面・印字調査を通して再度検証し、第一種本は寛永元年（一六二四）頃に『狭衣物語』（元和九年本）『大和物語』（十一行イ種本）と同一活字をもって印行され、他の古活字版諸本も寛永年間（一六二四～一六四四）に出された可能性が高い<sup>6)</sup>ことを論証した。

また、古活字版諸本の相互関係については森田氏の研究<sup>7)</sup>があり、氏の検証によれば、第一種本をもとに第二種本と第五種本が成立し、それぞれA・B系統を形成する。A系統では第二種本から第四種本と第七種本が作られ、B系統では第五種本から第六種本と二種類の寛永十六年本が作られたという。しかし筆者は、森田氏による検証には第三種本が欠落しており、その系統図式からは説明し難い本文異同が少なくない<sup>8)</sup>ということから再検討し、図1のように新たな系統立てを試みた。

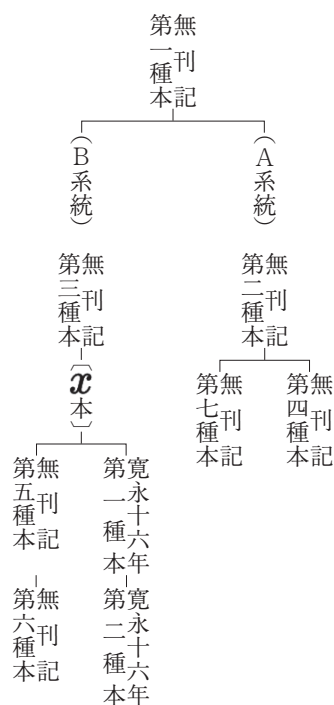


図1 『伊曾保物語』古活字版系統想定図

すなわち第三種本はB系統に属するものであること、第五種本と寛永十六年第一種本は親子関係ではなく兄弟関係であり、両本の親本は第三種本から派生したもの（仮に（**X**本）と呼ぶ）であるという見解を示したのである。

なお、古活字版諸本は、いずれも匡郭と界線の無い無辺無界であり、木活字を以て印刷されたものである。

### (1) 無刊記第一種本

現存最古本。寛永元年頃刊と推定。本文は、半丁十一行、一行二十二字（全角換算）を基本として組版・印刷されている。但し、中巻27丁裏面と同巻29丁裏面は十二行となっている。振仮名・濁点・句読点なし。字高約二・二糎。目録題「伊曾保物語上（中・下）目録」。内題「伊曾保物語上（中・下）」。版心は上部に「イソホ」、下部に「上（中・下）丁付」（目録丁には、丁付がなく、「目」とある）。尾題「伊曾保物語上

〔下〕終〔中巻は「伊曾保物語中」〕。上巻は二十九丁（うち目録一丁）、中巻は四十一丁（うち目録二丁）、下巻は四十二丁（うち目録二丁）から成る。なお、諸本は下巻17丁裏面9行に「なのとも」とある本と、「なれとも」とある本に区分される。諸本の本文間の異同は、印刷中に活字を差し替えたことによって発生したと思われるこの一例のみなので、これをもって二つの版種に分ける必要はなからうが、以下の書誌解題では、便宜的に「なのとも」系か「なれとも」系かを示した。

#### 東洋文庫蔵 三卷三冊（三—A—d—四）

「なのとも」系。改装薄褐色表紙（縦二六・二厘×横一八・八厘）。同種他本よりやや小さいのは、改装時に改めて化粧裁ちされたためであろう。中・下巻表紙には中央原無粹刷り題簽「伊曾保物語 中（下）」、上巻表紙には中央後補題簽に墨書「伊曾保物語 上」。各冊本文前に遊紙一丁を付す。印記「山岡文庫」（山岡浚明）、「狂哥／堂文庫」「真顔」（北川真顔）、「菊廼／屋／文庫」（菊廼屋真恵美）、「雲邨文庫」（和田維四郎）。

#### 国立国会図書館蔵 三卷一冊（WA七—三二）

「なれとも」系。改装藍色雷文繫地に桐唐草模様表紙（縦二七・二厘×横一九・六厘）、左肩打付朱書「伊曾保物語上（中・下）」、右下に同筆で「共三」と記す。本文中に墨筆振仮名の書入あり。小口に「伊曾保物語 上（中・下）」印記「尾府内／庫図書」（尾張藩徳川家）、「中川氏蔵」（中川得楼）。なお、合冊の際に帝国図書館が付した外表紙の後補題簽に墨書「伊曾保物語 上中下合本／全」。

#### 新村出記念財団重山文庫蔵 三卷三冊（〇九一—ロー四）

「なれとも」系。原装縹色表紙（縦二七・三厘×横二〇・〇厘）、中央原無粹刷り題簽「伊曾保物語 上（中・下）」印記「宝鏡寺」。京都帝国大学国文研究室旧蔵。

#### 静嘉堂文庫蔵 三卷三冊（一〇四—三三）

「なれとも」系。改装天色表紙（縦二六・六厘×横一九・四厘）に桐花模様印が押されている。左肩後補子持粹刷り題簽に墨書「伊曾保物語 上（中・下）」印記「乱丁（中巻27丁↓30丁↓28丁↓29丁↓31丁の順）あり、綴じ直しの際の誤りであろう。本文中に朱筆補訂の書入あり。小口に「伊曾保物語 上（中・下）」松井簡治旧蔵。

#### 国立台湾大学図書館蔵 上下二卷二冊（〇八五九七—〇八五九八）

「なれとも」系。改装焦茶色表紙（縦二七・四厘×横一九・九厘）。同種他本がすべて四つ目綴じであるのに対し、同本のみ五つ目綴じであるのは、改装時に本来の四つ目綴じを五つ目綴じにし直したためであろう。外題なし。上巻の後見返し裏に「池製本」の長方形朱印が押されているが、これにより同本の虫食いや破れを裏打ち補修したのは神田の製本師池上氏であったと推定される。

#### (2) 無刊記第二種本

現存するA系統最上位の本。寛永元年（同五年刊と推定。本文は、半丁十二行、一行二十一字（全角換算）。振仮名・濁点・句読点なし。字高約二二・二厘。目録題「伊曾保物語上（下）」目録（中巻は「伊曾保物語目録中」。内題「伊曾保物語上（中・下）」版心は上部に「イソホ 上（中・下）」下部に「丁付」（目録の丁付と本文のそれは別）。尾題

「伊曾保物語上（中・下）」上巻は二十八丁（うち目録二丁）、中巻は三十九丁（うち目録二丁）、下巻は四十丁（うち目録二丁）から成る。

天理大学附属天理図書館蔵 三卷三冊（九九二―イ一九）

改装栗皮色表紙（縦二七・六糎×横一九・二糎）、左肩打付墨書「伊曾保物語」。上巻表紙の右上には短冊型の紙片を貼り、そこに「花五十三全三（小津桂窓筆）」と記し「西荘文庫」の印を捺す。各巻後見返しの下に「胤春」と書入あり。本文中に稀に補訂の書入あり。印記「西荘文庫」（小津桂窓）、「兎角／菴」（小田果園）、「宝玲文庫」（フランク・ホーレー）。果園文庫旧蔵。

阪本龍門文庫蔵 三卷三冊（四三九）

改装香色横刷毛目表紙（縦二六・五糎×横一九・〇糎）。印記「函崎文庫」（田沢宗伯）、「榎舎之記」（千家俊信）、「掖斎」（湯島狩／谷氏求古楼／図書記）（狩谷掖斎）、「皎亭改蔵」（内野皎亭）、「陽春廬記」（小中村清矩）。下巻32丁表面9～11行に当る紙面が破損、それを次のように補写している。

たとうつるものはおきなかしわさにことならず／心かろきものはつねにしつかなる事なしと／見えたりかろ／しき人のことをしんしてみだ／りにうつる事なかれたゞしよき道にはいく度も／右四行以寛永十六年写本補

また、中巻後見返しの下下に墨筆「函崎文庫」と書入あり。なお、下巻後見返しには、次のような墨筆識語あり。

この活字板伊曾保物がたり三巻は明治三年／さ月神田集議判官より恵れたるを家蔵す／陽春廬のあるししるす

陽春廬こと小中村清矩によるこの識語から、同本は明治三年五月まで神田集議判官（神田孝平）の手元にあったと推定されよう。

土井忠生氏蔵 三卷三冊

所在不明未見。大槻如電が仙台藩主より拝領し、その家蔵となった本と<sup>(9)</sup>いう。川瀬氏の『古活字版之研究』には「安田文庫<sup>大槻氏</sup>旧蔵<sup>10)</sup>」と載る。『善本影譜』第八輯には、同本上巻目録と本文一丁表面の写真が掲載されている。<sup>(11)</sup>

(3) 無刊記第三種本

現存するB系統最上位の本。寛永元年～同十六年刊と推定。管見に及んだ現存本は、新村出記念財団重山文庫蔵（〇九一―ロー三）の一本のみ。同本によれば、本文は半丁十二行、一行二十二字（全角換算）。振仮名・濁点・句読点なし。字高約二二・五糎。目録題「伊曾保物語下目録」。内題「伊曾保物語下」。版心は上部に「イソホ」、下部に「下丁付」（目録には「下目一（二）」とあり、本文は「下三」から始まる）。尾題「伊曾保物語下終」。下巻は三十八丁（うち目録二丁）。本文前後に遊紙各一丁を付す）から成る。

新村出記念財団重山文庫蔵 下巻一冊（〇九一―ロー三）

黒色表紙（縦二七・三糎×横一九・二糎）。左肩打付墨書「伊曾保物語□」。印記「新村／出印」。小口に墨書「イソホ物語」。本文後の遊紙に「宝永二乙酉三月廿有三日」「奉転読大般若經六百軸家内安全祈」「奉納坂東」「奉読誦普門品三十三卷」等の墨筆試書あり。

松廼舎文庫蔵 三卷三冊

焼失未見。中川氏の報告によれば、「安政五年文岡岡田康礼珍藏とあり」<sup>(12)</sup>という。なお、同本上巻本文一丁表面の写真が『江戸時代小説類展覧会 陳列書目録』に掲載されている。<sup>(13)</sup>

(4) 無刊記第四種本

A系統。寛永四年頃刊と推定。管見に及んだ現存本は、天理大学附属天理図書館蔵(九九二―イ一)の一本のみ。同本によれば、本文は半丁十二行、一行二十二字(全角換算)。振仮名・濁点・句読点なし。字高約二二・二糎。目録題「伊曾保物語上(下) 目録」。内題「伊曾保物語上(下)」。<sup>(14)</sup>版心の記載無し。尾題「伊曾保物語上(下)」。<sup>(15)</sup>上巻は二十七丁(うち目録一丁)、下巻は四十丁(うち目録二丁)から成る。上巻と下巻の間に遊紙一丁あり。

天理大学附属天理図書館蔵 上下二卷一冊(九九二―イ一)

改装藍色表紙(縦二六・四糎×横一八・九糎)、左肩後補朱色無枠題簽に墨書「伊曾保物語全」、右肩に「聴雨窓」の蔵書票を貼り、そこに「元和／伊曾保／反訳」と記し「珍」の印を捺す。印記「磯廼／屋印」「五十瀬／好間亭蔵／石田郷」(生川正香)、「三角／文／庫記」(奥田三角)、「竹冷挿架」「珍」(角田竹冷)。本文中に稀に朱筆傍点、墨筆補訂・読点の書入あり。前見返しには次のように識語あり。

此書むしはみたるを古かね店にて／買りて其後としふる事于今／に至るふと思ひよりて四十年／かくばかりむしのはみたを買求め／尚あぢはいぞほめてよむなり／(花押)

こゝにかくむだ書キせられたるは藤堂家の儒官たりし奥田／三角先

生の兄南勢柳田に住居せられし奥田某なりかくむた／書せられしは今明治十八年より百余年のむかしなるべし／生川正香  
△中巻第一より四十迄巻冊あり／此合本には中欠けり  
また、後見返しには次のように識語あり。

此書の事は絵入朝野新聞紙に細辛に記したるごとしされは／今またいふべき事なしおのれ古き書を好むくせありて此頃書林／にて見出て、買ひ求めたる也／案するに元和寛永年間に出版せしものなるべし尤表紙は／もとえられし時なかりしを後にふる表紙をかけてかくは一冊に／せられしものと見ゆ 元和寛永などに開板せしものは／上製本は丹表紙なり〔筆者注〕「なり」は見消 並本はしづ表紙なり／明暦年間の書籍目録にいそほ物語といふ名見えたれはふるき物／なる事また論なし 八十三翁／生川正香しるす

(5) 無刊記第五種本

B系統。寛永十六年以後刊と推定。本文は、半丁十二行(目録は十一行)、一行二十一字(全角換算)。振仮名付漢字・濁点付平仮名を交用。句読点なし。字高約二一・〇糎。目録題「伊曾保物語上(中・下) 目録」。内題「伊曾保物語上(中・下)」。<sup>(16)</sup>版心は上部に「上(中・下)」、下部に丁付(目録本文通しての丁付)。尾題「伊曾保物語上(中・下) 終」。上巻は二十五丁(うち目録一丁)、中巻三十五丁(うち目録二丁)、下巻三十六丁(うち目録二丁)からなる。

宮内庁書陵部蔵 三卷一冊(一五二―一〇八)

改装山吹色布目地松皮菱繫表紙(縦二七・一糎×横一七・七糎)。左肩後補子持枠題簽に墨書「伊曾保物語 全」。巻頭に三卷分の目録を一括



している。印記「阿波国文庫」(徳島藩蜂須賀家)、「不忍文庫」(屋代弘賢)。

**国文学研究資料館蔵** 三卷三冊(九九―一九二)

原装藍色雷文繫地蓮華唐草模様表紙(縦二七・五糎×横一七・九糎)。題簽剥落、左肩打付墨書「伊曾保物語 上(中・下)」。各巻後見返しに墨筆「中田全氏／三冊之内」とあり。

**刈谷市中央図書館蔵** 三卷一冊(W一九六二)

国文学研究資料館蔵マイクロフィルムで印面確認。本文中に後人による振仮名の書入あり。

**松廼舎文庫蔵** 三卷三冊

焼失未見。中川氏の報告によれば、「南畝文庫・篁径文庫等の印記」をもつという。なお、同本上巻本文首の写真が『江戸時代小説類展覧会陳列書目録』に掲載されている<sup>(15)</sup>。

(6) 無刊記第六種本

B系統。寛永十六年以後刊と推定。原本を調査し得た新村出記念財団重山文庫蔵本(〇九一―ロー二)によれば、本文は、半丁十二行(目録は十一行)、一行二十一字(全角換算)。濁点付平仮名を交用。句読点なし。字高約二一・〇糎。目録題「伊曾保物語上目録」。内題「伊曾保物語上」。版心は上部に「上」(23丁には「上」の記載なし)、下部に丁付(1・2・23丁には丁付なく、3丁から「四(二十四)」とある。但し5・6丁は「六」と重複。なお「十九」を欠くが、落丁か)。尾題「伊

曾保物語上終」。上巻は二十四丁(うち目録一丁)からなる。

**中川芳雄氏蔵** 三卷一冊

中川邦明氏のご厚意により写真で印面確認。巻頭に三巻分の目録を一括している。印記「中味藤」。

**新村出記念財団重山文庫蔵** 上巻一冊(〇九一―ロー二)

改装黒色雷文繫表紙(縦二七・〇糎×横一六・九糎)、左肩に打付朱書された痕跡あり。本文中に墨筆振仮名の書入あり。印記「若樹文庫」(林若樹)、「中井蔵書」(中井浩水)、「無声蔵」(朝倉無声)。林若樹旧蔵。従来、同本は無刊記第五種本に分類されていたものの、原本調査の結果、中川芳雄氏本と同種本、すなわち無刊記第六種本であることが判明した。なお、改装時に付した外表紙の中央後補題簽に墨書「伊曾保物語 上巻」。

(7) 無刊記第七種本

A系統。寛永中刊と推定。管見に及んだ現存本は天理大学附属天理図書館蔵(九九二―イ二三)の一本のみ。本文は、半丁十二行、一行二十二字(全角換算)。字高約二二・五糎。目録題「伊曾保物語上(下)目録」(中巻は「伊曾保物語目録中」)。内題「伊曾保物語上(中・下)」。版心に記載なく、綴じ目(ノド)に「上(中・下)丁付」(上巻は本文からの丁付、中・下巻は目録からの丁付。中巻25丁の丁付が24丁のそれと同じく「中二十四」とある)。尾題「伊曾保物語上(中・下)」。上巻は二十六丁(うち目録一丁)、中巻は三十六丁(うち目録二丁)、下巻は三十六丁(うち目録二丁)からなる。

天理大学附属天理図書館蔵 三卷三冊（九九二―イ二三）

濃縹色鳳凰唐草模様表紙（縦二八・一糎×横一八・九糎）、左肩後補無  
粹題簽に墨書「伊曾保物語 中（下）」（上巻は欠）。上巻前見返しに  
「老部三冊福井佐平義真氏より／求／渡辺鶴童」と識語あり。上巻本文  
末に「福井佐平／三ノ内」、上巻後見返しに「三部ノウチ 福佐」、中巻  
本文末に「うるし田村／福井氏」、中巻後見返しに「三之内 福佐」、下  
巻本文末に「うるし田／福佐」、下巻後見返しに「三之内 富久佐」と  
書入あり。また、本文中に墨筆振仮名の書入あり。

(8) 寛永十六年第一種本

B系統。本文は半丁十二行（目録は十一行）、一行二十一字（全角換  
算）。振仮名付漢字・濁点付平仮名を交用、句読点なし。字高約二三・  
四糎。目録題「伊曾保物語上（中・下）目録」。内題「伊曾保物語上  
（中・下）」。版心は上部に「上（中・下）」、下部に丁付（本文からの丁  
付）。尾題「伊曾保物語上（中・下）終」。下巻本文末に刊記「寛永十六  
年卯月吉辰」。上巻二十五丁（うち目録一丁）、中巻三十五丁（うち目録  
二丁）、下巻三十六丁（うち目録二丁）からなる。

筑波大学附属図書館蔵 三卷三冊（ル―一五〇―一）

原装丹色雷文繫表紙（縦二七・一糎×横一七・八糎）。左肩後補無粹題  
簽に墨書「伊曾保物語 上（中・下）」。本文中に稀に朱筆傍点・濁点・  
補訂の書入あり。印記「福田文庫」（福田敬園）、「待賈堂」（達磨屋五  
一）、「耘堂」、「伏嘉」。上巻前見返しに次のように識語あり。

此書近世紅毛学家の説くわしければ爰にいわす寛永十六年上木の本

は／稀也万治二年己亥正月吉日とある本も上の巻下の巻のみにて中  
の巻／あるはすくなし大浪先生珍藏の弘郎察国鏤刻の此物語りの／  
画本よりみれば此本は其十の一也所載甚すくなし／波尔杜瓦尔人よ  
り口授して国語にせしものなるべし 芸堂（印）  
なお、刊記の下に墨筆「弓場勘右衛門（花押）」とあり。

天理大学附属天理図書館蔵 三卷三冊（九九二―イ一五）

改装焦茶色表紙（縦二一・二糎×横一五・八糎）。外題なし。印記「藤  
（伊藤為之助）、「月明荘」（反町茂雄）。中巻後見返しに墨筆「吉田氏」  
と書入あり。

鶴見大学図書館蔵 上下二卷一冊（九一三・五一―I）

前表紙は、改装黒色雷文繫地蓮華唐草模様表紙（縦二六・六糎×横一  
七・九糎）で、その貼紙として『江家次第』（承応二年版）十一卷7丁  
表面の刷反古が使われている。後表紙は黒色表紙。外題なし。印記「残  
花書屋」「賓南」（戸川浜雄）、「月明荘」（反町茂雄）、「一馬」（川瀬一  
馬）。

土井忠生氏蔵 下巻一冊

所在不明未見。森田氏の報告によれば「目録一丁裏に識語。大槻氏印等  
の印記。富士川游・大槻如電・安田文庫旧蔵」という。

(9) 寛永十六年第二種本

B系統。本文の行数・文字数、字高、目録題、内題、尾題、丁数、刊  
記、版心上部の巻名表記は、前掲の寛永十六年第一種本と同様。しかし、

版心の下部の丁付が目録本文通しであり、版心の中部に横線「一」を引く（上巻・中巻13丁・35丁・下巻）という点は、寛永十六年第一種本と異なる。

#### 天理大学附属天理図書館蔵 三卷三冊（九九二―イ二一）

改装栗皮色表紙（縦二六・五厘×横一七・五厘）、左肩後補題簽に墨書「伊曾保物語 上（中・下）」本文中に振仮名の書入あり。各巻後見返しに墨書「享保十七<sub>壬子</sub>年（中巻には「享保十七<sub>壬子</sub>歳」、下巻には「享保十七<sub>壬子</sub>歳」）五月十一日 関川平四郎（印「関川／松前／江指」）と識語あり。印記「宝玲文庫」（フランク・ホーレー）、「月明荘」（反町茂雄）、「（山形に「中」）備吉」、「岡田真／之藏書」（岡田真）、「関川／松前／江指」（関川平四郎）。

#### 石川武美記念図書館成實堂文庫蔵 三卷三冊

原装黒色雷文襷雨竜表紙（縦二六・三厘×横一七・七厘）、左肩後補海松色地題簽に墨書「伊曾保物語 上（中・下）」破損による欠丁（上巻23・25丁）あり。下巻末刊記の下に「大みや西へ入町／吉文字屋／権兵衛」と識語あり。印記「不羈齋／図書記」（秋山不羈齋）、「黒門通条上町／帯屋半兵衛」、「青山艸堂」「蘇峰／審定」（徳富蘇峰）。木箱に収められ、蓋の裏面に「大正改元秋九月初三／神山君狸菴所贈／蘇峰清存／寛永十六年活字／伊曾保物語三冊」と箱書あり。

#### 彰考館文庫蔵 下巻一冊（亥一―九二三四）

国文学研究資料館蔵マイクロフィルムで印面確認。本文の行間・上欄に書入あり。印記「潜龍／閣蔵／書記」（徳川斉昭）。本文前の遊紙裏面に

次のように識語あり。

伊曾保物語下巻 活字板／三卷ノ内下巻ノミ一卷アリ印本二三／卷ノ全本アルヲ太田南畝カ許ニテ／見シコトアリ此本欠本トイヘトモ活字／板ニテ珍書也

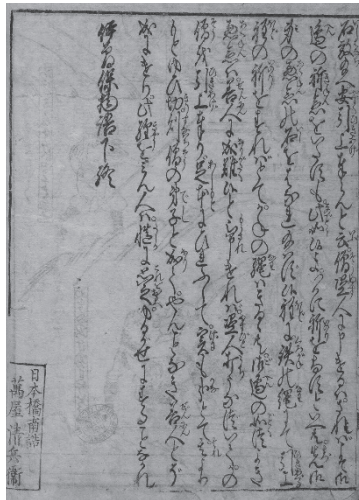
以上のほか、学習院大学日本語日本文学科学研究室は、古活字版『伊曾保物語』の影印を所蔵している。これは、上巻は無刊記第四種本、中・下巻は無刊記第五種本の、取合本の影印である。影印の原本と思しき本が反町茂雄の古書販売目録に見え、近年の臨川書店の古書販売目録に載っていたのを確認した。しかし、同書のその後の行方は知らず、所在不明で未見である。

## 二 整版本

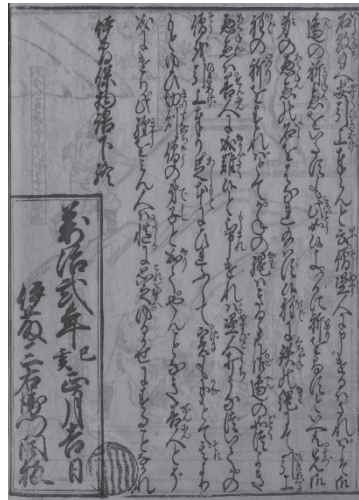
森田氏は、『伊曾保物語』の整版本に「万治二年整板本（絵入）」と「無刊記整板本（絵入）」があるとし、前者は伊藤三右衛門、後者は万屋清兵衛による版行であることを述べている。<sup>(21)</sup>伊藤三右衛門が出した前者は「万治貳年<sub>亥</sub>正月吉日／伊藤三右衛門開板」という刊記を具えており、それを「万治二年整板本（絵入）」と呼ぶことに異論はない。しかし、もうひとつの「無刊記整板本（絵入）」という命名には、若干の問題があるように思われる。

一般に「刊記」とは刊本の刊行年月のみならず、刊行地や刊行者名（版元名）など「刊」の情報を書した部分を指す。森田氏が「無刊記整板本（絵入）」の伝本として唯一取り上げている「東北大学」本（東北大学附属図書館狩野文庫蔵）を披見すると、刊行年記はないものの、下





万屋本  
(ケンブリッジ大学付属図書館蔵)



伊藤本  
(国立国会図書館蔵)



中村本  
(日本大学図書館蔵)

図2 下巻本文末と刊記

巻末に「日本橋南詰／万屋清兵衛」とあるように刊行地と刊行者名は明記されているので「無刊記」という命名は表現の的確を欠くと言わざるを得ない。その命名による誤解を招くのを極力避けるため、ここでは、森田氏以来「万治二年整板本（絵入）」「無刊記整板本（絵入）」と呼ば

れてきた両本を、それぞれの版元名を以て「伊藤本」「万屋本」と呼ぶことにする。

また、従来報告されている整版『伊曾保物語』は、伊藤本と万屋本のみであるが、ほかに京都の書肆である中村五兵衛が出した本、すなわち

下巻末に「寺町二条下町／中村五兵衛」の刊記を持つ、中村本と呼ぶべき本の現存を確認した（図2）。中村本については、江戸時代の出版目録である書籍目録に『伊曾保物語』の版元として記載された「中村五」が中村五兵衛だろうと推定されていただけで、これまでの『伊曾保物語』の研究史の上でその実体が言及されたことはなかったのである。

なお、伊藤本・中村本・万屋本の現存諸本は、すべて同じ版本から摺られたものである。但し、中村本・万屋本の刊記そのものに、匡郭にそぐわぬいわゆる埋木感を覚えることと、印面から窺える版木の摩耗状態とその推移から、『伊曾保物語』の整版本は、その版本が伊藤↓中村↓万屋の順に移動し、刊行されたと考えられる。

# 伊藤本

伊藤本は、既述のように下巻本文末に「万治貳年<sup>亥</sup>正月吉日／伊藤三右衛門開板」という刊記を持つ。原題簽は表紙の左肩に子持杵刷り題簽「伊曾保物語 上(中・下)」。<sup>(23)</sup>版面に四周単杵の匡郭を持ち、版心は上下の白口黒魚尾の間に「イソホ 上 ○(丸) 一」のように書名の略称と巻名、丁付を記している。本文は半丁十二行、漢字の多くには振仮名が付されており、全文に濁点・句点<sup>(24)</sup>が施されている。目録題「伊曾保物語上(中・下) 目録」。内題「伊曾保物語上(中・下)」。<sup>(25)</sup>尾題「伊曾保物語上(中・下) 終」。上巻は二十三丁(うち目録一丁)、中巻は三十丁(うち目録二丁)、下巻は三十一丁(うち目録二丁)からなる。なお、古活字版の挿絵のない形で鑑賞されてきた『伊曾保物語』が伊藤の手にかかり、初めて挿絵を備える。挿絵は三巻中に十五図が収められ、そのうち九図は上下二場面の挿絵となっている。

版元の伊藤三右衛門については、京都の書肆と推定されるのみで、その営業地を明確に示す記録資料は確認されておらず、身元の詳細は全く知られていない。伊藤が出した版本は、井上隆明『改訂増補近世書林板元総覧』には「懐胎用心書 明暦3年」「伊曾保物語 万治2年」の二点のみが著録されている。<sup>(25)</sup>

『国書総目録』では、『懐胎用心書』の所蔵機関として「慶大富士川」「東北大狩野」「乾々」をあげているが、「慶大富士川」(慶應義塾大学信濃町メディアセンター)本の所蔵は確認できず、「東北大狩野」(東北大学附属図書館狩野文庫、二二三〇八一)本と「乾々」(杏雨書屋、乾一一一四)本はいずれも刊記を欠くので、それらが伊藤から出されたものかを確かめることはできない。しかし、岡雅彦ほか編『江戸時代初期出版年表 天正十九年～明暦四年』に立項された「懐胎用心書」によれ

ば、赤木文庫旧蔵の一本に「明暦三丁西季秋吉祥日／伊藤三右衛門開板」との刊記がある<sup>(26)</sup>というので、伊藤の名義で『懐胎用心書』が出されたことは確実であろう。但し、赤木文庫旧蔵本の実物は、現所在不明で未見である。

それはともあれ『懐胎用心書』の残存の少なさ、特に伊藤の名義で出された現存本が赤木文庫旧蔵の一本しか知られていないことから、明暦三年から始まった伊藤による同書の出版はさほど長くは続かず、発行部数そのものも少なかったのであろう。それに対し『伊曾保物語』の伊藤本は、以下に示すように現存する部数の多さと、版木の経時変化を現す欠損レベルのバラツキの大きさから、多刷次にわたり発行され、かなり普及していたと考えられる。

## 京都大学図書館蔵 三卷一冊(四一四〇／イ／一貴)

筆者所見本のうち最も摺りの早いもの。改裝桑染色表紙(縦二六・八糎×横一七・四糎)、左肩後補芥子色無杵題簽に墨書「伊曾保□□」。本文の行間・上欄に稀に墨筆補訂の書入あり(改裝時に改めて化粧裁ちされたためであろうか、上欄の書入が一部切られている)。下巻末に遊紙一丁を付す。小口に「イソホ 全」。印記「百井文庫」(百井為衡)、「開卷有益」。

## 鳥取県立図書館蔵 三卷三冊(WA九一三／三四六／石谷)

改裝丹色表紙(縦二五・九糎×横一七・四糎)、左肩打付墨書「伊曾保上(中・下)」。<sup>(27)</sup>印記「大坂堂嶋／井筒屋／しゝみ橋南端」「文器堂」(井筒屋治助)、「須善」(須原屋善五郎)。

加賀市立図書館聖藩文庫蔵 上下二巻二冊（九三〇—三）

原装縹色表紙（縦二六・一糎×横一七・四糎）、左肩打付墨書「伊曾保物語 上（下）」。「印記「錦城小／学校印」（加賀市立小学校）、「聖藩／文庫」（大聖寺藩）、「大□□／□□有／□□印」（大聖寺町共有書籍印）か）。

早稲田大学図書館蔵 三巻三冊（二四 〇〇二—六）

改装縹色表紙（縦二六・三糎×横一七・一糎）、中・下巻は左肩原題簽、上巻は左肩後補無梓題簽に墨書「伊曾保物語全三冊上」。「印記「長嶋町五丁目／大野屋惣八」（大野屋惣八・総太郎〈大惣〉）。

早稲田大学図書館蔵 上巻一冊（文庫三一 E〇二五二）

改装縹色卍字繫地に唐草模様表紙（縦二五・八糎×横一六・五糎）。外題なし。「印記「雲英文庫」（雲英末雄）。下巻を欠くため刊記不明であるものの、匡郭の欠損状態等から、後掲の東洋文庫蔵本（三—Fa—ろ—五六）より先に摺られたものと思われるので、伊藤本と考えてよからう。

天理大学附属天理図書館蔵 三巻三冊（九九二—イ一）

改装焦茶色表紙（縦二六・三糎×横一七・二糎）、左肩後補子持梓題簽に墨書「伊曾保物語 上（中・下）」。「印記「竹清」（三村竹清）。上巻後見返しの下下に「明治丁亥天／十二月中旬求之」と識語あり。また下巻後見返しに次のように識語あり。

こその秋伊勢まつ坂なる青瓢庵にて此本見侍りしニことし／二月文行堂にて見しまゝにもとめつ庵主の沽却せしなりもとの／表帋をはきすて四辺を裁ち近ころの茶表紙かけてありけれ／ハむしつくるひ

の次手ニふるき太平記の表帋之ありつればそれ／と改めつ外題もはきすてられければ早稲田大学之本もて補／ふその本は色白き厚手のかみにて蠟箋まかひの浅黄表紙／なりき大正十一年壬戌三月昼竹清主人鴻雁野堂にてしるす

国立国会図書館蔵 三巻一冊（WA八—三）

改装朽葉色卍字繫地に唐草模様表紙（縦二六・四糎×横一七・〇糎）、左肩原題簽（上巻のもののみ）。「印記「中川氏蔵」（中川得楼）、「大／居」。後見返しの中中央や下に朱筆で「春水之本」とあり、またその上に三枚の紙片を貼り、それぞれに次のような識語等あり。

伊曾保物語と云草子三冊あり元和／寛永の比やんことなきかたのかゝせ給ふ／書と桂川氏いへりと最上氏話なり此書／蛮国の書を翻訳せし始なりとそこれら／今の西洋学のよつておこれる所といふ／へし（山崎美成海録／文政丁亥）

寛永十六年出版伊曾保物語 三冊／跋尾此書入あり／此書ハ梁息上人より借り葛岡栄二其子に命し騰写して予に贈／れり芸堂の端書あり曰く寛永十六年上木の本は稀なるものなり／万治己亥正月上木之本ハ上下巻のミにして中の巻なし共ニ大浪／先生珍藏の払郎察国鏤刻の此原書より見れハ其年〔筆者注「年」は見消〕の一なり／所載甚少し 必竟波瓦人より口授して国語にせしものなる／べし  
右書様ニ万治本上下巻ノミニシテ中巻ナシトアレトモ此万治本現ニ三巻ナリ／書入セシ人二巻ノ本ヲ見テ欠本ナルヲ知ラス中巻ナキモノトセシナラン予マタ／別本活字古板本ヲ収蔵ス但サシ絵ナシ是即チ寛永本ナラン／得桜主人識

なお、合冊の際に帝国図書館が付した外表紙の後補題簽に墨書「伊曾保

物語上中下合本全」。

**筑波大学附属図書館蔵** 三卷一冊（ル一五〇―二）

改装灰色布表紙（縦二四・八糎×横一八・一糎）、左肩後補無粋題簽に墨書「絵入伊曾保物語」。本文前に遊紙一丁を付す。印記「宮永／蔵記」、「那珂」（那珂通世）。

**東洋文庫蔵** 三卷三冊（三―Fa―ろ―五六）

改装黒色卅字繫地に唐草模様表紙（縦二六・三糎×横一七・四糎）、上・下巻左肩原題簽、中巻には左肩後補題簽に墨書「伊曾保物語 中」。上巻前表紙の右下の紙片に墨筆で

伊曾保物語板本稀ナリ／又別ニ活板モ蔵ストモニ珍ト／為可シ予カ所蔵ノ活字板ノ本ニ吉雄氏誌／サレタル大惣ノ板本ト云モノ此板ト同物ト／見ユ此本ニハ万治ノ年号アリ三園誌スとあり。また、刊記の右に朱筆「此年号削ル本アリ別ノ新版ノ如クニ物セシワザナリ」。印記「雲邨文庫」（和田維四郎）。

**国文学研究資料館蔵** 中巻一冊（ナ四―九八五）

改装丹色雷文襷雨竜表紙（縦二六・五糎×横一七・二糎）。外題なし。印記「大寺□」。下巻を欠くため刊記不明であるものの、匡郭の欠損状態等から、前掲の東洋文庫蔵本（三―Fa―ろ―五六）よりは後に、後掲の岩国徴古館蔵本（五・二二）よりは先に摺られたものと思われるので、伊藤本と考えてよからう。

**柳沢昌紀氏蔵** 三卷三冊

原装丹色表紙（縦二六・七糎×横一七・四糎）、左肩後補無粋題簽に墨書「伊曾保物語 上（中・下）」。

**岩国徴古館蔵** 三卷三冊（五・二二）

原装縹色表紙（縦二六・四糎×横一七・七糎）、下巻は左肩原題簽、上・中巻は外題なし。

## (2) 中村本

先述のように中村本は、従来報告されることがなく、現時点ではここ初めて報告する日本大学図書館本が唯一の伝本である。伊藤本の刊記を削り取り、「寺町二条下町／中村五兵衛」と埋木修正したという変更点を除けば、中村に譲渡された版木に手を加えた形跡は見られない。なお、版元の中村五兵衛は、およそ正保・慶安から元禄まで活動したといわれている<sup>(2)</sup>。営業地は、京都寺町通二条下ル町と知られ、日本大学図書館本の刊記にある通りである。

**日本大学図書館蔵** 三卷三冊（九一三・五一―八五）

原装紺色表紙（縦二五・八糎×横一八・八糎）、左肩原子持粹刷題簽に「伊曾保物語 上（中・下）」。この原題簽は、本体とともに伊藤本と同一版木で摺られたものである。下巻本文末に刊記「寺町二条下町／中村五兵衛」。

## (3) 万屋本

従来、万屋本として登録されていたのは、東北大学附属図書館狩野文庫本が唯一であったが、ピーター・コーニッキー氏と林望氏によるケン



ブリッジ大学蔵古典籍の調査で万屋本の一本が発見され、一九九一年の『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録―アストン・サトウ・シーボルト・コレクション』に登載されている。近年、そのケンブリッジ大学付属図書館蔵本の全丁画像データが公開されるようになっており、筆者もこれを通して同本の印面を確認した。これら万屋本は、前記の中村本の埋木刊記を削り、「日本橋南詰／万屋清兵衛」（下巻本文末）と埋木修正している。

また、万屋本に至って現れた新現象は、刊記の他に、版心上下の線がほぼ全丁に亘って削られていることである（図3）。この線を削った理由は定かではない。が、これは、万屋が中村から譲渡を受けた版木に手を入れた意図的な改刻の痕跡として、下巻を欠く零本が万屋本か否かを判別する目安となる。

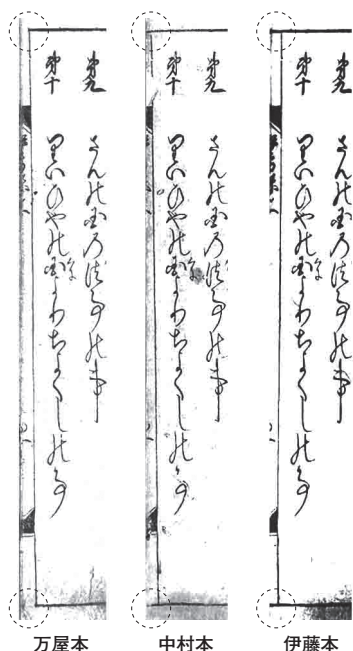


図3 版心比較  
（上巻第1丁表面。各本の図版出典は図2と同。）

なお、版元の万屋清兵衛は、天和三年から宝暦年間まで活動した江戸

の書肆である。<sup>(28)</sup>

東北大学附属図書館狩野文庫蔵 三巻一冊（別置―字三一七〇三）  
改装丹色蜀江錦に獅子表紙（縦二五・八糎×横一七・六糎）、左肩後補  
黄色地子持枠題簽に墨書「伊曾保物語」<sup>寛永十六年印本</sup>。題簽に  
「寛永十六年印本」とあるのは誤認であろう。印記「青山堂」（青山堂枇杷麿）、  
「順正／常住」。

ケンブリッジ大学付属図書館蔵 三巻三冊（FJ・八三六・三六）  
同館公開の画像で印面確認。縹色表紙。左肩後補子持枠刷題簽に墨書  
「伊曾保物語」上（中・下）。下巻後見返しに「明治四年二月廿六  
日英刊之原本ト／対読アル但普通ノ英本トハ伊曾／保カ伝ノ詳畧甚異ナ  
リ Yasuda」と識語あり。印記「英国／薩道蔵書」（アーネスト・サト  
ー）。

以上のほか、所在を把握していながら未調査の伝本もあるし、また未  
発見の伝本も少なからずあるだろうと思う。今後もし引き続き伝本の調  
査・考察を進め、書誌解題のより一層の充実を図っていきたい。

#### 註

- (1) 川瀬一馬『古活字版之研究』上巻（安田文庫、一九三七年）、六〇四～六〇五頁。
- (2) 中川芳雄氏による諸本の調査結果は、新村出・柊源一校註『吉利支丹文学集 下』（朝日新聞社、一九六〇年）、二〇八～二一頁に収録されている。
- (3) 森田武「解説」『仮名草子集 日本古典文学大系 九〇』（岩波書店、一九六五年）。
- (4) 森田前掲論文、二〇～二二頁。
- (5) 川瀬前掲書、六〇五頁。また、同著『増補古活字版之研究 中』（日本古書籍商協  
会、一九六七年）、九〇三～九〇四頁。



- (6) 拙稿「古活字版『伊曽保物語』の出版年代再考」(『国語国文』八七―七、二〇一八年)、一六―三四頁。
- (7) 森田前掲論文、二二―二三頁。
- (8) 拙稿「『伊曽保物語』版本系統の再検討―B系統古活字本の本文異同を中心に―」(『近世文芸』一〇六、二〇一七年)、一―一四頁。
- (9) 大槻如電「伊曽保物語のものがたり」(『此花』四、一九一〇年)。
- (10) 注一の川瀬前掲書、六〇五頁。
- (11) 川瀬一馬解説『善本影譜 八』(日本書誌学会、一九三二年)。
- (12) 中川前掲論文、二〇八頁。
- (13) 『江戸時代小説類展覧会陳列書目録』(日本図書館協会、一九三二年、三頁の上段の図版)。
- (14) 中川前掲論文、二〇九頁。
- (15) 前掲『江戸時代小説類展覧会陳列書目録』、三頁の下段の図版。
- (16) これら福井の書入については、吉見孝夫「古活字版『伊曽保物語』無刊記題七種本の基礎的研究」(『イソップ資料』九、イソップ資料研究室、二〇一七年)、一七―一八頁を参照。
- (17) 森田前掲論文、二二頁。
- (18) 『伊曽保物語』(学習院大学国文学研究室、一九七一年)。
- (19) 反町茂雄『弘文社待買古書目』四二(弘文社、一九七二年)、三九四―三九五頁。
- (20) 『臨川書店 和古書善本特選目録 二〇一五年冬期特集第二十九号』(臨川書店、二〇一五年)、七頁。
- (21) 森田前掲論文、二二頁。
- (22) 朝倉治彦編『仮名草子集成 三』(東京堂出版、一九八二年)の「解説」では、元禄九年の書籍目録に版元として記載された「中村五」は、「中村五兵衛だろう。中村五郎右衛門もあって、『醍醐随筆』を寛文十年に刊行しているが、中村五兵衛としておく。：『中略』：しかし、この板の『伊曽保物語』は、見る機会を得ていない」(四九四頁)と述べている。
- (23) 但し丁付に次のような混乱がある。上巻の丁付は「一」：「五」「六七」「八九」「十」「十一」「十三」「十五」：「廿八終」となっているが、実際の丁数は二十三丁である。中巻の丁付は「一」：「三」「四五」「六十」「十」は「七」の誤刻か)「八九」「十」「十一」「十三」：「十六」「十七八」「十九」：「卅五終」となっているが、実際の丁数は三十丁である。下巻の丁付は「一」：「四」「五六」「七八」「九」「十」「十一」「十三」「十五」「十七八」「十九」：「卅七終」となっているが、実際の丁数は三十一丁である。このように実際の丁数と丁付の間に、上巻は五丁分

中巻は五丁分、下巻は六丁分のずれが生じている。

- (24) 整版本に施された句点は原則としては「。」の白丸点である。但し、一部黒丸点に彫られたところがある。筆者の調査によれば、黒丸点となっているのは、上巻10丁に四例、上巻12丁に一例、上巻14丁に一例、上巻15丁に一例、上巻16丁に一例、中巻9丁に二例、中巻16丁に一例、中巻19丁に二例、下巻8丁に一例、下巻17丁に一例ある。
- (25) 井上隆明『改訂増補近世書林板元総覧』(青雲堂書店、一九九八年)、九五頁。なお、『懐胎用心書』『伊曽保物語』のほか、伊藤が出した版本に『北野通夜物語』(関西大学図書館本の刊記「明暦三年仲冬吉辰／伊藤三右衛門板行」)がある。
- (26) 岡雅彦ほか編『江戸時代初期出版年表 天正十九年～明暦四年』(勉誠出版、二〇一一年)、五九七―五九八頁。
- (27) 井上宗雄ほか編『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、一九九九年)の「中村五兵衛」項(柳沢昌紀氏執筆、四三六頁)を参照。
- (28) 万屋の出版活動については速水香織「江戸書肆万屋清兵衛の初期活動」(『近世文芸』七九、二〇〇四年)を参照。

〔付記〕

調査に際し、貴重な御蔵書をお貸しくださった柳沢昌紀先生はじめ、資料の閲覧で御高配を賜った諸機関各位に深甚の謝意を捧げる。

【編集委員会特記事項】

本稿は、本委員会による厳正な査読を経て掲載に至った論文であることを証する。

日本文化学科主任 青山英正  
紀要編集委員長 古田島洋介